Soviet anthropology in the institutional contexts :
Influences on the surrounding fields : Reading an
area through its 'Native' theory : The scientific
methodology of history of the Polish Marxist
historian, Jerzy Topolski

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲津, 由希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001250

学術理論の思想史的分析から地域をよみとく

——ポーランド史家トポルスキの歴史学方法論——

仲津 由希子

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

本稿は、ポーランドの代表的マルクス主義史家トポルスキ（1928-1998）の歴史学方法論を思想史的に分析することにより、社会主義時代におけるポーランドの学術研究の実態の一端に触れるものである。トポルスキの研究は、従来、アナール学派との近似性により理解されてきた。だが、そのテキストを丹念に読むと、ポーランドの認識論や論理学の成果を生かした「概念化」という異なる歴史学方法論に基づく研究だったことが判る。概念化とは、観察と抽象によって個々の「過去」の性質を把握し、得られた結果の真偽を第三者や史料との間で検証しあうことにより、歴史「科学」の漸進的發展を期す考え方だった。

旧社会主義圏における研究に対しては、後進的ないし本質主義的という見方が依然、存在する。だがそれは、当該地域に対して歴史的、政治的文脈を過度に強調し、西欧科学史とは別様に發展を遂げた、地域独自の科学思考を十分に理解してこなかったために生まれた偏見に思われる。

1 はじめに	5 マルクス主義をめぐる人文主義対科学主義
2 トポルスキについて	6 ポズナン学派と「科学」的な歴史学方法論
3 アナール学派とポーランド社会経済史家	7 「科学」的な反構築主義史学
4 トポルスキの「モデル的」社会経済史分析	8 結びにかえて

*キーワード：ポーランド史学、歴史学方法論、マルクス主義、科学哲学、認識論

1 はじめに

社会主義時代の研究について、ポーランド人研究者はよく相反する言及をする。一方では、スターリン時代を始めとして当局からの介入がいかに学問を歪曲したかを強調する¹⁾。だが他方では、社会主義時代を通じて、ポーランド人研究者は高水準の研究成果をあげ続けたと主張する²⁾。いずれの言質も、当事者の立場に立って想像力を働かせたならあまり矛盾していないと考えられよう。というのも、自主独立の精神が強い研究者であれば、当局の介入がいかに自分の研究を邪魔したかを人一倍、強く感じ、それを訴えたくなるだろう。他方で、そういう性格の研究者であればこそ、不自由な環境下でも、当局の監督の眼をかいくぐって、自分がいかに優れた研究業績をあげ続けたかを周囲に

誇りたくなるだろう。この意味で個々の言質は、社会主義ポーランドの学術研究の実態がいかなるものだったかを、客観的に把握させるものになっていない。

では、外部の人間が社会主義圏の学問を中立的に評価できているか。これも断言しにくい。なぜなら外部、特に欧米の研究者は、上述のようなポーランド人研究者の言質に接したとき、別角度からの論理を結びつけて、結局は東欧圏の研究の立後れを結論づける傾向があるからである。すなわち弾圧説をよんだ者は、自由主義圏の研究と比べるとイデオロギー的に偏った研究と結論づける。高水準説に対しては、一種のポーランド・ナショナリズムの言説とみなしてまともにとりあわない。このようなポスト社会主義国に対する偏見もまた、社会主義ポーランドの学術研究の実態把握を阻害してきたと考えられないだろう³⁾。

このように主観的言質と偏見が相互に助けあって、ポーランドの学術研究に関する理解が二重三重に阻まれている状況下では、予断を排するための方法論的工夫が、その実態を「正しく」把握するのに不可欠だろう。この場合、第1の方法として、研究者の環境（世代・学歴・活動拠点等）について統計的調査をとりいれながら、ある時期の研究者群の特徴を集合的に実証していく方法が考えられる（Maternicki 1990; 1999等）⁴⁾。第2に歴史的アプローチによる比較研究が考えられる。例えばコネリーは、戦後高等教育のソヴィエト化過程を東独・ポーランド・チェコ間で比較し、ポーランド諸科学の非スターリン主義的性格を歴史学的に裏づけた（Connelly 2000）。他にも様々な工夫は考えられよう。本稿は筆者の専門の関係から、第3の方法論的可能性として当該地域の学術理論の思想史的分析にとりくむものだが、これは現下であればこそ、著者の意図を忠実に再現しようとする思想史分析の研究手法に、一定の意義があるように思われるからである。

学術理論の思想史的分析とは、本稿では、(1) 著者に影響を与えた歴史的、科学的、哲学的な文脈と、(2) 著者が語りかけた相手との応答関係を再構成しつつも、(3) 著者が生涯とりくんだ全課題との関係で、(4) ある学術論文のテキストが著者の手でどう体系化されているか、その論理構造の丹念な把握を優先すること、とする。先述のように、これまで旧社会主義圏の学術理論は、政治的抑圧や後進地域といった「歴史的」文脈や「どれだけ『西』に近いか、どれだけドグマ的か」という「政治的」物差しで読まれがちだった。思想史研究の観点からすると、この状況は、テキスト自体の分析、特にテキストの論理構造全体を読む作業が不足している、と評価できるものになっている。

そこで本稿は、現地の代表的マルクス主義史家のひとりイエジ・トポルスキ（Jerzy Topolski 1928-1998）をとりあげ、彼の論文が何を背景に何を主張したくて書かれたものかを再構成する作業にとりくむ。彼の歴史学方法論は、従来、フランス・アナル学派との関連で理解され、「西」的と評価されてきた（本論第3節に後述）。だが論文の構成と使用されている術語に注意すると、当時、社会主義圏で一定の拡がりをもせてい

た分析哲学や科学哲学の探究と相関づけた理解がより重要な様相がみえてくる。ここから理解できるポーランド史学界の一面は、さらに1990年代の構築主義史学流行期に同地史学が独自の孤高を保った理由について、よく囁かれた原初主義・本質主義的思考以上に、欧米や日本ではあまり普及していない独特の科学哲学に支えられた歴史科学像があった点を指摘させる。本稿は、このような学術理論の思想史的分析から、逆に地域の実像の一断面に迫ろうとする試みである。

2 トボルスキについて

トボルスキは、1928年、ポズナンで出生した。アダム・ミツキェヴィチ大学（以下ポズナン大学）で経済学修士号、ミコワイ・コベルニク大学（トルン）で博士号を取得し、その後、学術幹部養成所（Instytut Kształcenia Kadr Naukowych、ソ連の赤色教授学院に相当）時代を経て、1955年、ポズナン大学助教授に就任、1968年には近代史・歴史学方法論学科（Zakład Historii Nowożytnej i Metodologii Historii）教授、1971年にはポーランド科学アカデミー会員にもなった。その後、1998年にポズナンで亡くなるまでに国際歴史理論及史学史学会理事（Board Member of the International Commission for the History and Theory of Historiography）、合衆国、カナダ、ドイツ、イタリアの大学やパリ高等教育院で客員教授、オランダのヴァッセナー高等学術研究所で研究員を務めている。国際的活躍はこれに留まらず、I・バーリンやH・ホワイト、R・コゼレックも編集委員に名を連ねた『歴史と理論（*History and Theory*）』（1960年創刊、出版地ハーグ）や『歴史学方法論史国際雑誌（*Rivista Internazionale di Storia della Storiografia*）』（1982年創刊、出版地ミラノ）等の国際誌編集委員も長く務めた。さらに7著作が外国語に翻訳され、うち代表作『歴史学方法論（*Metodologia historii*）』は英語、イタリア語、スペイン語、中国語等、多くの外国語に翻訳されている。

この『歴史学方法論』第1版は1968年に出版された。1960年代ポーランドは、歴史学の方法論や理論に関する書物の刊行が相次いだ時期で、同書の出版も基本的にこの流れの上に理解できる。当時刊行された類書の大半と同様、講義資料として大学で利用するために執筆されたので⁵⁾、数年ごとに記述の追加や訂正が図られ、版が重ねられた。とはいえ、『歴史学方法論』は、ポーランドでも圧倒的難解さで定評ある教科書だった。サイバネティクス用語を採用しつつ、独自の歴史術語と概念を導入し、史料の歴史学的吟味から特定の社会構造が歴史的に変動する過程を理論的に説明しようという、独特の方法論的体系を同書がもっていたからである。トボルスキの歴史学方法論は、(1) 大量の史料読破により正確さを期すと同時に、様々な学術理論に関する知識を増やして史料吟味能力を高め、(2) 研究対象とする社会の内外の諸要素の諸関係を有機的に関連づけつつ検討し、(3) その社会の構造が変化した原因、その原因が生まれた背景等を特定し、

統合モデルを打ちたてるといふ、歴史学方法論という言葉から一般的に想起される内容とは異なる内容をもっていた（さらにこの説明でも不十分なことについては、第6節で触れることにしたい）。

さて、このような彼の方法論は、冒頭で述べたように科学哲学との関係が深かったが、出身地ポズナンを中心とする中世ポーランド社会経済史家でもあったためにアナール学派とも関係が深いという別の顔ももっていた（Topolski 1978; 1987等）。先述のようにトボルスキが登場する英語文献や邦語翻訳文献をみるかぎり、大半が科学哲学に言及することなくアナール学派との関係で彼の歴史理論を紹介してきた。恐らく社会経済史—科学哲学という関心の結びつきが欧米諸国ではあまりみられないために、かわりに欧米型の社会経済史—アナール学派という連想をあてがうことにより理解が進められたのではないかと思われる。次節ではそうした紹介の一例として歴史学史家 G・イグガース（Iggers 1986）をとりあげよう。

3 アナール学派とポーランド社会経済史家

ポーランド社会経済史家に対するアナール学派の影響については、これまでに多くの指摘がある（Grabski 2000: 222-223等）。アナール学派とマルクス主義史学は、出自がまったく異なるのに相互にとりいれやすい論理的親和性をもっていた。似ていたということは、アナール学派の理論体系が検閲の目を逃れやすかったことも示唆する⁶⁾。それ故、アナール学派は社会主義ポーランドで受容されやすく、しかも普及しやすかった。とはいえ、両者の交流は、実は戦前からのもので、その関係を一方の他方に対する「普及」という単純な関係で捉えるべきではないだろう。トボルスキが指導を受けたルトコフスキ（J. Rutkowski 1886-1949）らポーランドの社会経済学者は、戦前からアナール学派第1世代の研究者と緊密に交流していた。また1931年、ポーランドでも独自に『社会・経済史年報（*Rocznik Dziejów Społecznych i Gospodarczych*）』を創刊していたのである（戦前の出版地はルヴフ、現ウクライナ領リヴィウ）。

さて1970年前後に社会主義ポーランドの史学研究を観察した G・イグガースは、この社会経済学者こそが理論と経験的知識の接合に熱心なポーランド史学を牽引していると考えた⁷⁾。ここでやや齟齬があるのは、彼が、接合作業に熱心なのがポーランド史学の特徴と考えており、だから「ポーランドの他のマルクス主義的歴史研究者よりも理論と経験研究の接合にはるかに熱心」な彼らに注目すると続ける点である。というのも、彼は、過度に単純化したマルクス主義モデルの援用に安住し、経験データ吟味のためのモデル鍛錬に努力しないポーランド純正マルクス主義史家も少なくないことに触れている。それ故、彼の記述は、全体的には接合に不熱心なのが同地史学の特徴だと解釈できるものにもなっており、整合性がとれていないと考えられる。彼は、1956年以降、『アナール

ル——経済，社会，文明 (*Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*)』等に掲載されたクーラ (W. Kula 1916-1988)，トポルスキ，ヴィシャンスキ (A. Wyszaiński) からポーランド社会経済史家の仕事をみて，ポーランド史学に対するイメージをかなり先行的に作りあげていたのではないだろうか。

いずれにせよイグガースは，彼らが外国雑誌に発表した論文から次の特徴を指摘した。(1) 彼らは単なるアナール学派受容者・亜流ではない。アナール学派と比べて生産過程や余剰への関心が強いからである。これは史的唯物論の影響と考えられる。だが (2) 彼らの「封建的」農業中心経済分析にはアナール学派との共通点もある。例えば計量分析や近代経済学の手法を積極的にとりいれ，比較研究のための分析枠組みを探究し，歴史を動かす社会的意識の役割を重視しているからだ。こう整理した上でイグガースは，トポルスキについて補足的に，アナール学派に該当しない要素があり，事件史や政治史への関心が強く，経済発展と政治構造との関係をより重視するようだと書き足した (Iggers 1986: 206-207, 209, 211-212)。この論理展開からするとイグガースは基本的に，アナール学派を手がかりにすることにより，(1) ポーランド社会経済史家の特徴を理解できる，(2) 同様の方法でトポルスキにも接近できる，(3) さらにポーランド史学の本質的特徴にも迫れる，と考えていたと推測される⁸⁾。

4 トポルスキの「モデル的」社会経済史分析

さてイグガースの接近法がどこまで妥当なのか。トポルスキのポーランド語による社会経済史分析論文をみることにより，具体的に検討しよう。本節では，まず彼の「ポーランド経済史のモデル的把握の諸問題」(Topolski 1978) の論理展開をざっと紹介する。

彼の理解するところ，当時の歴史学で最も発展していたのは人口統計学と経済史の分野だった。その最先端にあるのがアメリカ発の新経済史だった。同研究を，彼は，新古典派政治経済学に基づいた特定領域研究にすぎないと批判した。我々がめざすべきは，人々の経済活動と経済過程から歴史全体を展望していけるような「グローバルな経済史学」ではないか。「どのように歴史的現実が『生まれる』のか」。「歴史の発展メカニズムとはいかなるものか」。経済史研究もこの問題に答える必要があるのではないか (Topolski 1978: 26)。そのための「概念化 (konceptualizacja)」「モデル」構築，これを彼は論文の執筆目的に掲げた。

そこでトポルスキが採用するのが，「弁証法的行動主義 (aktywizm dialektyczny)」という考え方である。彼は同理論をマルクスが『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』で萌芽的に示したものとする⁹⁾。歴史のメカニズムを知るには，「社会的存在」である人間の活動が歴史的に果たす役割の勘案が不可欠である。だが，その際，注目するのは「自発的・自然発生的な (とくに優れた人々の) 人の活動 (aktywizm spontaniczny)」，

すなわち暴動や英雄の活躍のような一過性の行動ではない。着目するのは、その蓄積が経済構造の大転換を生むような、無名の人々による日々の行動である。以下、彼の主張を引用してみよう。

第1に「自分の（経済的・政治的・文化的といった）目的の実現を図ろうとしながら、人は歴史過程も『生みだす』。人々の活動のグローバルな効果は、この過程に生じる。これらはその行為者には部分的に自覚されるにすぎない。だが学習し、計画性を身につけるにつれ、人が自ら認識する自分の活動結果の範囲は徐々に増えてくる」。第2に「このことから歴史（すなわち経済史）はふたつの側面を有する。主観的なそれと客観的なそれである。主観的観点からの考究は人々の活動とそのメカニズムの分析を意味する。一方、客観的観点からの考究は同活動のグローバルな影響に関する省察を意味する」。第3に「人々の活動の結果は、新たな行動がとられる条件を生みだす。それは、人々が直接、そこに存在し、与えられ、委ねられるような『状況』である。この条件は確かに人々に直接的に影響しない。だが間接的に意識に働きかける。行為面では、その意識の最も重要な中身は、世界観的（世界、すなわち活動条件についての）知識（wiedza）であり、また活動者（たち）がもつ、自分の嗜好に対して説明を与える体系である」（Topolski 1978: 26-27）。

抽象的な表現が続くので、具体例を用いて趣旨をより明解にしよう。例えばある人間(A)が、あるハンバーガーショップ(B)のハンバーガーが好きだとする。(A)はハンバーガー食べたさに(B)店を訪れる。(A)としては自分の好物で食欲を満たしたいだけである。だが(A)の行動はめぐりめぐって、(B)店の経営と従業員の生活をも助ける。あるとき、購買という自分の行為の派生的効果を学んだ(A)は、今度はお気に入りの店を応援したいという、本来の食欲とは無関係な理由でハンバーガーを購入するようになった。この場合、(A)の意識の推移(好物→学習→応援)のメカニズムの分析と、(A)の行動が(B)店運営に果たした一定の波及的効果の分析は、別々の学問的課題として検討できると判る。

次に(B)店はおいしいハンバーガーで集客をめざす店だったが、ある時、不況の煽りを受けて、商品の質を落とし値段も下げる改訂を行った。(A)は不況時だからこそ従来の高品質ハンバーガーを食べたいのにと感じ、(B)店に通うのをやめた。結果、(B)店の売上は大幅に落ちた。(B)店は、不況時も客は安かろう、悪かろうでは買わない、高価でも高品質の商品を買おうとするという世界観を得た。そこで品質を再び高め、値上げし、そして売上を回復した。このとき、世界観が「客観的に正しい」必要はない。(B)店長が得た世界観的知識は、時代や地域、他条件が変われば通用しないかもしれないし、本来は別の教訓を得るべき状況で、(B)店長が誤った教訓を導いたにすぎなかった可能性もある。しかし正しいか否かに関わりなく、この世界観的知識に基づく「高くて良いハンバーガーを売ろう」という店長の戦略的判断は、ある一定の社会的効果を生むだろう。もし(B)店が収益を回復すれば、その様子を見た(C)、(D)店が(B)店を真似、結

果的にハンバーガー市場全体も変容する可能性がある。従って、この世界観的知識の真偽に拘わらず、この知識が一定の社会的効果＝経済的・歴史的事実を生みだすことに留意しなければならない。このような観察・推論の整理結果が弁証法的行動主義であることを確認して、再びトポルスキのテキストに戻ろう。

彼はここから経済史が、主観的過程（Aの意識の流れ等）と客観的過程（Aの行動がB店舗の運営に果たした役割等）両方を扱う必要があるのは明瞭だとする。そして（1）人々の行動（様式）、（2）行動の結果、（3）歴史的事実として確定したもの、（4）その事実が全体としてどんなしくみで出現したと考えられるか、という4行程に分けた考察が必要だと唱えた。

さて、トポルスキは続いて、4行程の相関関係をより簡単に把握できるよう「モデル的な理解」＝数式化しようと唱える。さらに多くの独自定義の語彙を登場させる。モデルとは研究対象の現実を単純化した像、それを的確に反映した型とされる。モデルは全部を網羅的に単純化するのではなく、相互の絡みあいを想定するだけで歴史的過程のある程度、理解できるような「より根本的な要因や要素」だけを演算する。その演算に必要なもの、ある現象のどこからどこまでが一現象として考察対象になるのか、そのうち何が主要因で何が副次的要因か、これらを特定する根拠を提供するのが理論である。理論が適切なら「選別過程をより助けてくれる」。そのためより適切なモデルが作成できるとする（Topolski 1978: 28）。両者の関係について、彼が論文後半で扱う中世ポーランド（10～18世紀）社会経済史の検討例から具体的にみておこう。この事例でのモデル化対象は、中世ポーランド封建体制下の経済史ないし経済変動である。そして理論は、人間や社会についての一般的仮定と中世の人間や社会についての特殊仮定を指している。

まず（1）人々の活動については、人々の経済活動と、結果的に経済的効果をもたらすような活動両方を考慮に入れる。後者には、衣食住等物質的・生理的需要を満たすための活動や、その人間が属している社会からの要求を充足しようとする社会的活動等が含まれよう。中世ポーランド封建社会の場合は、静的志向性が社会からの文化的要請だったと考えられる。なぜなら中世ポーランド社会は、封建的かつ「アジア的生産スタイルをもつ未開社会の条件に生きる社会」だったからだ。こうした二重後進社会の特徴は「すべてのもの（既存の構造）を維持しようとする（変化を望まない）」点にある。しかし他方で当時はポーランドにもヨーロッパ文明が波及し始め、人々の活動が動的になりつつあった。従って、人々の行動には保守性と積極性が過度的に同居していたと仮定する必要がある。

次に経済成長を促すようなタイプの（2）活動結果を検討しよう。中世経済の場合、大前提として、需要－供給関係から経済効果が生まれ、やがて拡大するという近代経済学の基本があてはまらない。それ故、資本主義的な投資はなかったと考える。かわりに

含めるのは、封建経済を実質的に支えたと考えられる農民の生産と地代・小作料、それから小規模でも認められる経済成長の促進要因と考えられる技術の進歩や組織形態の変容（資本主義経済における投資の役割を代替するものとして）である（Topolski 1978: 28-30）。

トポルスキはこの検討結果を整理し直し、モデル化の必要変数として、社会集団や階級の需要と所得、そして人々の行動とその結果、さらにこれらの諸要素に全体として影響を及ぼす制度（国家等）を割りだす。そして需要（ P ）と所得（ D ）に対して、それぞれ階級（集団・個人・制度）（ i ）と時間（ t ）を演算する次の計算式を提示した。本計算式から得られる関数 $\triangle AE$ が経済効果を表す（Topolski 1978: 32）。

$$\triangle AE = f\left(\frac{P_t^i}{D_t^i}\right)$$

この計算式は全体として、 $\triangle AE$ が何らかの形で閾値を超えると、生産様式の変化が起き、歴史が変動することを表すとも思われるが、トポルスキが最後段でとりくんだのは「具体化（konkretyzacja）」と彼がよぶ作業の方だった。それぞれ時代状況に応じて（ i ）に様々な変数（農民や貴族の活動状況等から割りだされる数値）を入れ、 $\triangle AE$ の値がどのように変化するか（例えば16～17世紀前半は経済成長が著しく、17世紀後半～18世紀前半は停滞期だった等）を検証したのである（Topolski 1978: 32-38）。

5 マルクス主義をめぐる人文主義対科学主義

前節で紹介したトポルスキ論文は、人の世界観的知識を扱う等、いくつかの点でアナール学派を連想させる。だが、その理解は果たして適切なものか。本節で順に検討していこう。

全体の論理構成はまず、イッガースのいうようにオーソドックスなマルクス主義モデルと確かに異なっているだろう。マルクスは、ごく一般的解釈では人々の意識と無関係に生じる生産構造の変化が歴史変動を決定づけ、また経済関係が人々の意識を規定すると唱えた。トポルスキ論文の特徴として第1に、1978年時点で人の意識と無関係なこの歴史把握法を退けている。

これまでの経済史では、このような（主観的側面と客観的側面をともに配慮する：筆者註）要請が十分に考慮されてこなかった。主観的叙述を好む（特に伝統的政治史絡みの）歴史学派もいれば、客観的過程の観点からの理解を好む学派も存在した。マルクス主義史学は主観的歴史像の把握に反対し、人々の活動範疇において理解しない過程プリズムによる歴史把握を一度ならず一方的に強調しがちだった。このような立場の典型例はとりわけアルチュセールの業績である。

経済史学は、大部分が（特にジントーゼ的な業績では）客観的過程の観点から把握されてきた。そのため、例えば産業革命がいかに生じたかとか、農場－地主経済の発展過程の流れがいかなるものだったかの方が、そのような過程の底辺に人々のどんな決断があったかとか、またなぜ他ではなく、そのような決定が受け入れられたのかよりも、歴史家の関心をひいたのだった（Topolski 1978: 27）。

第2に、トボルスキがここでなぜアルチュセールを批判したのか、この点を考えてみよう。トボルスキがここで批判したのはアルチュセールの『資本論を読む』である。1965年出版の同著は、1975年にポーランド語訳がでた（Althusser 1975）。ただこの理論のどこを批判したのか、トボルスキ論文は明らかにしていない。そこで本稿では当時の社会主義圏におけるアルチュセール批判を参考に、トボルスキの立場を大まかにのみ位置づけることにしよう。ニーメス（Nemeth 1980）他が指摘するところによると、この頃、アルチュセール理論を、硬直したドグマ的・スターリン主義的マルクス主義と理解する見方が、社会主義圏にはあった。この理論の特徴のひとつは、認識論上の科学とイデオロギーとの区別を唱えた点にある。彼はプレハーノフが区分した史的唯物論と弁証法的唯物論をとりあげ、前者を歴史に関する知識を提供する科学、後者を証明不可能なイデオロギーと説明した。アルチュセールによれば、歴史主義的・人文主義的マルクス主義解釈はイデオロギーに属するのであって、人間という要素を廃した非歴史主義的構造分析こそが真に科学的な研究体系だった。この主張に対して、歴史主義的・人文主義的側面を否定すると、ある社会の歴史的变化を満足に説明できないという批判が出てきた。

その際、注目したいのは、革命や行動という局面を除外するから歴史的变化が説明できないとされた点である（Nemeth 1980: 363-364）。この場合、アルチュセールの主張は、卑近には行動主義を支持する人文主義者を批判していたが、図らずも党による前衛という考えすら批判するものになりえたのではないだろうか。というのも、人の手で社会を変革しようとする点では、人文主義者も前衛党支持者も共通していたと思われるからである。このマルクス主義像は、恐らく、科学の力で全社会的合理的計画化をめざす19世紀末の科学主義と連動して生まれた（Pajestka 1989: 159-163）。仮にマルクスの理論体系が、歴史の中に弁証法的運動を見出し、資本主義が一定段階に達すると、肥大化した内的矛盾が同経済システムを終焉に導く弁証法を作用させるとする史的唯物論と、それとは別に経験から知識を獲得することにより生じる人々の意識の変化を生成の原動力とする弁証法的唯物論のふたつから構成されるとしよう。ならば、党が革命を起こし社会を牽引するというレーニン以降のマルクス主義像は、弁証法的唯物論を独自に解釈して含意を転倒させれば、生まれる余地のある議論かと思われる。

こう整理するとトボルスキの主張の含意は、革命的実践を促すのではない、歴史を解

積する科学的方法論としての弁証法的唯物論の意義の復活にあったといえるだろう。彼は、人の実践が歴史に果たす役割をくみこみ、史的唯物論も考慮した歴史的社会変動論を展開した。彼においては、多数の無名の人間による、知識を媒介とした意図的・非意図的な行動の、予期された結果と予想していなかった結果の無数の集積とその相互作用が、歴史的な社会変動をもたらすとイメージされていた（Swiderski 1980: 355-356等を参照）。

トポルスキは「知識」を幅広く捉え、「知覚 (świadomość)」すなわち「理念、価値世界、心性、民衆の視座、科学 (idea, świat wartości, mentalność, wiedza ludzka, nauka)」(Topolski 1978: 27) 等も含めているので、字面上はアナール学派の心性史を確かに彷彿とさせる。だが議論が質的に異なることを、トポルスキの『歴史学方法論』の該当箇所を参照しながら、第3の立ち位置として確認しよう。

仮に社会的経験の「第3レベル」として心性に着目し、量的研究や解釈学的な総体的把握を通じて身体史をめざしたりする、総合化がアナール学派の基本的な方向性だったとしよう。ならば、トポルスキの関心は対照的に、知識を媒介にした微視的な因果法則性論の復活におかれていたといえる。物事の生成可能順序は無限ではありえない。このことをうまく説明するには、外部条件ではなく外部条件に関する人の知識こそが人の行動の動機づけの根拠だと考える必要がある。人々の行動は、条件そのものによって多様化するのではなく、外部条件についてその人間がどれだけの知識をもっているかによって多様化する。この知識(z)を媒介に外部条件(X)と人間の行動(Y)との因果関係を検討してみよう。すると、(X)と(Y)の間には、確かに1対1で呼応する必然的因果関係は存在しない。だが、(x)が与えうる知識(z)、(x)から人が獲得しうる(z)にはそれぞれかぎりがある。それ故、先行する外部条件(X)が後続する人の行動(Y)を必ず発生させるわけではないが、(x)から発生しうる(y)、しえない(y)、ないしは(y)が発生する条件として想定できる(x)、想定できない(x)は存在すると考えられる。従って物事の生成可能な順序、ないしは不可能な順序はここから割りだせるだろう。つまり(X)と(Y)を大文字の事実のタイプとして、(x)と(y)を実際の諸事実とし、(1)と(2)を解明項とすると、被解明項は(3)となるが、知識(z)の存在のため(X)、(Y)は無限定にはならない。彼が知識に注視したのは、むしろこの説明のためだった (Topolski 1984: 471-473等を参照)。

$$(1) X \rightarrow Y$$

$$(2) x \in X$$

$$(3) y \in Y$$

さて、アナール学派との異同を確認した上で、最後に第4の特徴として、人間の社会的意識をも勘案するのが科学的マルクス主義だと主張した点を、改めてあげてみたい。トポルスキの「科学」概念は、同主義をめぐり20世紀後半に登場した科学主義対人文主

義という通俗的対立構図（前者として人間の意識の位相を排除したものが科学的マルクス主義だと主張したアルチュセールの「構造マルクス主義」等、後者としてサルトルの実存主義や主に実践性の欠落をめぐってアルチュセール批判を展開した人間中心主義的マルクス主義等）と呼応していない。

ポーランドでは人文主義派の動きこそ欧米のそれとやや連動し、国外でも知られていた。日本にも数多く著作が紹介された、コワコフスキ (L. Kotakowski 1927-) ら人文主義者（いわゆる「修正主義」者）は、ドイツ古典哲学や初期マルクス、ルカーチ、グラムシを好み、国際的にやや連携していた（初期紹介例として田村 1969；フエツチャー 1969；奈良 1971等）。だが、ポーランドで科学主義を標榜したトポルスキや彼が属していたポズナン学派 (Szkoła poznańska) の動きは、アルチュセールのそれと何ら関係がなかった。ポズナン学派マルクス主義者は、人文主義派が「ドグマ的」と心理的に嫌悪した論理実証主義¹⁰⁾、戦前のルヴフ＝ワルシャワ学派 (Szkoła lwowsko-warszawska, またはポーランド学派) が展開した分析哲学¹¹⁾、これらを基盤にしなが、K・ポパーやTh・クーンらによる同時代の科学哲学や認識論、論理学と連動しつつ、研究を深めていたのである。

しかし、日本にほとんど紹介されなかったポズナン学派の動きは、実は社会主義圏で一定の広がりをもつ学術潮流のひとつだったことを指摘しておく必要があるだろう。かつて日本では『思想』誌上で「論理学論争」が展開されたことがある。これは1950年スターリン「言語学論文」に端を発したものだ。同論文は、それまでブルジョア科学として学術的意義を否定してきた分析哲学系の形式論理学の意義を認めた。形式論理学が弾圧されたのは、それがマルクス主義の弁証法的論理学と相容れない論理構造をもっていたからである。形式論理学は一般に、科学者が統一的物理的世界のうちのまだ明らかになっていない部分を少しずつ明らかにし、いつか科学的知識の百科事典的統合を果たすという静的な実証主義的世界像を支える。他方、弁証法的論理学は、「物」に潜む相矛盾する二面間の闘争が「否定の否定の法則」を通じて物事の生成・変化・運動を促す、という動態的世界観をもっていた。従って1950年「言語学論文」が登場した背景には、当時の社会主義圏で社会工学的諸政策が一定の成果を収め、漸進的社会完成像が現実的に意識されるようになり、結果的に形式論理学的分析の価値が否定できなくなったという変化が指摘できる (Sarlemijn 1985: 324)。

とはいえ、両論理学の統合は結局、不可能だと、ソ連では程なく公式発表された。ただその後も、統合を模索する研究者が、社会主義圏でもそれ以外の地域でも跡を絶たなかったのである (Sarlemijn 1985: 325; 嶋崎 1985)。ここで注目したいのは、そうした研究者が共通して、サイバネティクス論、システム論、ゲーム理論等、数学的論理学を基盤とする理論の援用により、弁証法との橋渡しを試みた点である。このような研究の広がり、関心の共有、着眼点の近似性に着目するなら、トポルスキ論文は、ポズナン

学派や論理学についての理解なしに読むことはできないと考えられるだろう。トポルスキが自分の研究課題を深めるのに利用できた思惟の「工具」類はいかなるものだったのか、そしてそれらを用いて、彼自身はいかなる独自の体系化を試みたのか。次節では、こうした点に留意しながら、ポズナン学派の業績について確認していくことにしよう。

6 ポズナン学派と「科学」的な歴史学方法論

ポズナン学派とは、ポズナン大学を拠点に結成された学派である。1930年代ポーランドにサイバネティクス理論を紹介したヴィエグネル（A. Wiegner 1889-1967）教授と彼が在籍していた哲学・歴史学部論理学科（Zakład Logiki Wydziału Filozoficzno-Historycznego）を中心に出発した。1953年、ヴィエグネルの後をギエディミン（J. Giedymin 1925-1993）が継ぐが、彼も1966年に渡英し、学派運営はクミタ（J. Kmita 1931-）¹²⁾の手に委ねられた。1969年、論理学科は哲学史学科（Zakład Historii Filozofii）と合併して哲学研究所（Instytut Filozofii、所長クミタ）、1976年に文化学研究所（Instytut Kulturoznawstwa）へと改組される。一般に1969年のクミタ就任をもってポズナン学派創始とする¹³⁾。

学派の関心対象は必ずしも統一的とはいえず、例えばクミタは後に歴史認識論や文化理論に関心を寄せるようになり、もうひとりの代表ノヴァク（L. Nowak 1943-）¹⁴⁾は科学哲学を応用した理念化（idealizacja）という学術方法論の構築に邁進した。ただし基本的に人文科学方法論の構築をめざした点では共通していた。人文科学の特徴は、自然よりも遙かに多種多様に雑然と存在する具体的な経験的実在を扱う点にある。その中で何が具体的に検討すべきデータで、それはどのように検討すべきデータか。これまでその選択基準は、すべて各研究者の嗜好や感性に委ねられてきた。これからは問主観的対話を可能にする科学的再構成、選択基準を提供する理論が必要である。ある研究者による経験研究を他の研究者が利用して、演繹的に一般化をめざせるようにしなければならない。彼らはこのような動機づけの下で、人文科学方法論の構築に尽力した（Kmita and Nowak 1968）。つまり彼らの科学主義とは、自然科学的手法を人文・社会科学にまで拡大しようという研究姿勢を意味していた。

その過程で彼らが注目したのがマルクスの科学方法論である。注意したいのは彼らがマルクス主義の理論的優位性を唱えた訳ではない点である。彼らが試みたのは、世界を認識する科学的手段としてのマルクス主義の理論的含意、方法論的効用の保持だった。彼らは『資本論』等を丹念に輪読しあい、その研究成果を1970年代前半に共編論集で披瀝している（Nowak 1970; Kmita 1971; Nowak 1974）。彼らが辿りついたのは、マルクスは方法論的自然主義を採用しているという結論だった。

彼らによれば、マルクスは法則が人間活動を支配するとする運命論的歴史哲学を展開

したのではない。高度に体系化された新しい抽象一個物（具体）吟味法を展開したのである。マルクスは、社会・経済的構造と人間の行動の相互作用について慎重に観察を重ね、何かが生成された過程、生成されたものが果たした機能をひとつひとつ丹念に整理していった。その結果、ある種の法則性を発見した。重要なのは、その法則性はすでに現実の世界には存在しておらず、様々な要素をふるいにかけての結果、研究者の頭の中のみ、理念的、抽象的に抽出されたものであるという点である。

ノヴァクは、この手続き全体を自然科学＝物理学的手法の延長と捉え、それを「理念化」と名づけた。理念化とは、直接的経験をすべて現象学的に実写するのではなく、現象の本質をなす関係の法則のみ掴もうとする方法論である。例えばガリレオは、物体の落下現象について重力のみを本質と捉えた。実際の落下現象には空気抵抗等の付随的な要因がいくつも働く。だが空気抵抗がなくても落下現象は起きる。従って落下現象の説明としては、空気抵抗は副次要因にすぎず、理論に加える必要がないと考えられるだろう（Nowak 1977: 12-17）。対して、クミタはほぼ同様の内容のものを反自然主義的「方法論的構造主義（strukturalizm metodologiczny）」と名づけた。これは確かに事象観察の段階では自然主義的方法論を採用するが、本質―副次要因を見極め、それらを階層的に腑分けしていく段階では、むしろ構造主義的な異なる（反自然主義的）方法論を採用しているのではないか、という見解に基づく命名だった。

見解に相違はあるものの、マルクスの手法が、観察と哲学的吟味により経験的現象すべてを描写しない「科学理論」として成立しているとする点で、両者は共通する。彼らはさらに、ルヴフ＝ワルシャワ学派、とりわけアイヂュキェヴィチ（K. Ajdukiewicz 1890-1963）の論理学の遺産を生かし、こうした理念化によって得られた仮説が、検討対象の本質的構造をきちんと説明（第3者に適切に認識させること）できれば、その仮説は真だとみなせるという独自の真偽説を展開した¹⁵⁾。この点については、いくつか事例をあげてみよう。

第1に夕暮れという現象を考えてみる。カラスが鳴き、ビルの壁の色が黒ずみ、星の光が肉眼で捉えられるようになる。こういった個々の現象すべてに言及しなくても、太陽が沈み、辺りが暗くなるという本質的法則さえ説明できれば、第3者に夕暮れという現象が何であるかを伝えられるのではないだろうか。逆にビル壁の色が黒ずむという説明で、夕暮れという現象を第3者に的確に伝えられるだろうか。

第2にアンディ・ウォーホルのマリリン・モンローの「写真」を想起しよう。彼の作品は、肌や髪の色が違って見ても見た者がモンローの写真だと認識できるという、人の興味深い認識現象を示している。ここで顔の輪郭や眼の形や位置が違った場合はどうだろうか。肌や髪の色が異なる写真に比べると、モンローの写真だと認識できる確率は低くなるだろう。ここからモンローの顔という現象においては、眼や輪郭がより本質的、肌や髪の色は副次的要因という検討結果が得られる。この例でも自然界では顔の各部位は

平等に存在しているが、より本質的なものを抽出しないと第3者には適切に認識させられないと確認できる。

第3に人の似顔絵を考えてみよう。ポズナン学派の考える理念化された内容は、この似顔絵に相当する。我々は人の似顔絵作品をみたとき、「似ている」とか「似ていない」とか感じるだろう。その似顔絵について、対象人物の特徴をよく捉えた作品と第3者が判断できれば、その似顔絵は真である。どこか部分的に違うと感じれば、黒子の位置や口の表情等に修正や改善が必要である。修正を加えるまでもなく、対象人物とは到底思えないなら、その似顔絵は偽である。ここから判るのは、似顔絵を描く方法＝理念化方法には限りがあるということである。つまり理念化された内容が無条件・無制限・相対的に乱立することはありえない。第3者が共有できることが、その成立要件なのである。

さて、以上のようにポズナン学派の主張を簡単にまとめたところで、ポズナン学派第3の代表人物としてのトポルスキの話に戻ろう。年齢的にみても、また歴史学方法論に関する共著をすでに1960年に出版して「マルクス主義者の転回 (zwrót marksistowski)」ともいわれる大きな衝撃を現地研究者に与えた点を見ても (Topolski and Malewski 1960)、彼の方法論への関心は前2者に先行していたと考えられる。その研究は、ノヴァクらとの共同研究を通じてこそ発展していった。しかし、彼は、通時的・個別具体的性格をもつ歴史を研究対象にしたので、自分の「概念化」(ノヴァクの「理念化」と内容的にほぼ同様)した内容が第3者だけでなく、実際の歴史によっても検証されるという別の課題を抱えていた。そのため、彼の「概念化」作業の意味は結果的に前2者とさらに異なることになった。ここまで理解したときに、第3節で触れた社会経済史論文における彼の挑戦の意味あいは、初めて正確に理解できてくるのではないだろうか。

同論文の構成が、(1) 経済史の客観的側面のみを抽出しようとするアルチュセールのような研究者を批判し、(2) 知識や認識を介して人が歴史に果たす役割をくみこんだ歴史過程論を、(3) 概念化モデルとして提示するとなっていたことを思いだそう。

繰返しを避けるため、もっとも重要な点だけを指摘する。それは、トポルスキのアルチュセール批判の根幹にあったのは、単なる主観的側面の分離以上に、実は後者が無意識に採用している西欧科学に伝統的な主観性－客観性という二元論的区別そのものでもあった、という点である。トポルスキは論理学・認識論の成果を生かし、主観－客観二元説を排した「科学」像を導入した。喩えるなら、トポルスキは、我々が「犬」という抽象語を使うことにより個別具体的な犬について第3者と情報を共有し、その真偽(例えば実は犬ではなく猫だった等)を検証できるように、過去も概念化されることを通じて、第3者と共有し真偽の検証が可能になる、としたのである。特に歴史の場合、第3節末に登場する数式化は、後世に実際に生じた経済構造の歴史的变化を再現できなければ、くみいれた変数や関係性の想定法が誤っていたという検証を可能にする。つまり、

トポルスキの構想は次のように説明できる。数式化はまだ様相が判らない歴史的状況について演繹的再現を可能にする。それと同時に、史料の発見と検討の結果を照合した理論の検証も可能にする。こうした検証を繰り返し経て、歴史「科学」は漸進的に発展していく、と。いいかえると、トポルスキの歴史研究構想は、動態的な歴史把握手続き（弁証法）と、それによって得られるモデルの検証を通じた牛歩的歴史科学進歩（分析哲学）というふたつの論理を接合したものになっていた。このような展望の下に、第3節の数式は提起されていたのである。

それ故、仮に歴史主義的・人間中心主義的・目的論的・全体論的マルクス史学像に対して、第2次大戦後、正面から挑み、認識論上の革命を起こしたのがアルチュセールの構造マルクス主義だったとしよう。これは主観-客観二元説を伝統的に採用してきた西欧科学ならではの学説史理解だと考えられる。トポルスキは主要著作でアルチュセールをすべて無視するばかりか、構造主義的な歴史解釈全般に対し、この段階で漸く「熱情にかられて個別具体的事例を研究したり、思弁的哲学に甘んじたりして、堂々巡りの議論をすることに関心がない」歴史研究者が登場すること（Topolski 1984: 142）、「歴史学では、構造主義的段階を経験しないと弁証法的な物の見方ができない」ことを指摘する（Topolski 1976: 128）。トポルスキは『歴史学方法論』において、古代以来の歴史文献を探查し、歴史省察方法論の変遷を科学的パラダイムの漸進的変化として捉え直している。構造（論）的把握に続くのが論理（学）的把握、その先にマルクスの弁証法的歴史省察法（概念的把握）は漸く登場する¹⁶⁾。

トポルスキに従うなら、例えば夕暮れという現象を、主観主義者は神の使いが走らせる馬車と捉え、実証主義者は、カラスが鳴く、壁の色が黒ずむ、とひとつひとつ証明していくと、やがてその物理学的現象全体が解明できると考える。また構造主義者は太陽が沈む、カラスが鳴くといった諸要因が重層的に絡みあって夕暮れという現象を創りだしていると考え、相対主義者はカラスが鳴くとも、壁の色が黒ずむともいえると考え。漸くマルクスが夕暮れを日が沈み、辺りが暗くなる現象だと考えた。トポルスキの学説史理解は、極論するなら大凡このようなものにもなっていたのである。

なお最後につけ加えるなら、トポルスキの科学的方法論への関心の高さの背景には、指導教授ルトコフスキの影響や先述のポズナン学派との相互作用といった直接的要因以外にも、社会的関心の高さという広い環境要因が指摘できるだろう。より長期的な要因としては、戦前にルヴフ＝ワルシャワ学派を生みだしたポーランド学界の学術的な土壤があげられるだろう。1965年、ポズナン大学から学際誌『方法論研究（*Studia Metodologiczne*）』が創刊されている。同誌は社会主義時代を通じて、廃刊されることなく、マルクス主義系、非マルクス主義系問わず、また分野も問わず方法論に関する諸論文が掲載され続けた。

ごく短期的な要因としては、1968年3月の「修正主義」者一斉追放のために、学問

に対する諸弾圧が強まったという外部印象がもたれている1970年代ポーランドでは、方法論的多元性に基づく社会科学・哲学再編成という事態が密かに進行していた点が指摘できるだろう。1972年、『哲学研究 (*Studia filozoficzne*)』誌上でクチンスキ (J. Kuczyński 1930-) が呼びかけたのは、前世代のように誰がドグマ的で誰が創造的かと闘争するのではなく、科学の社会的権威と社会工学的な哲学の役割を自覚し、調和的社会的発展のために、各研究者は持論の方法論的可能性をより高めていくべきだというものだった。ポズナン学派の活動は、この学術再編期に重要な意義を認められ (Kuczyński 1972: 26)、そして体制転換後の現在、先述の「修正主義」者よりむしろ高評価を受けるものにもなっている (Mackiewicz 2001: 62-66, 66-70)。

7 「科学」的な反構築主義史学

以上のように、トボルスキは独自の歴史学方法論をもち、そして社会主義ポーランド史学界で高い評価を受けてきた。このことが意味するのは、同学界には彼の業績を高く評価するような土壌 (関心のあり方や歴史学へのとりくみ方) があったということである。もちろん、トボルスキだけが社会主義ポーランドを代表する唯一の歴史家ではなかった。だが、上記の点からみえてくるポーランド学界の一樣相からは、社会主義圏における学術研究に対するこれまでの「西側」からの理解に、ある種の政治性が潜んでいたのではないかと指摘できるように思われる。すなわち序論で触れたように、現地学問全体の拡がり方について理解が断片的なまま、例えばトボルスキの社会経済史論をアナル学派と結びつけたり、「修正主義」者らを好んでポーランド人の代表として表象したりすること自体に、何らかの政治的嗜好がなかったといえるだろうか、と。その結果、現地学問に対し実像と乖離した外部イメージをひとり歩きさせ、現地の研究動向について理解し損ねる事態を一部に出現させていなかったか、と。

一例として、構築主義史学に対する体制転換後ポーランド史学界の独自の沈黙とその外部評価を、とりあげてみたい。1990年代末、日本のロシア・東欧史研究では、民族・民族史をめぐる本質主義対構築主義間の対立が先鋭化した。民族を歴史的構築物とみなす作業は、民族・民族史を実体的に扱ってきた、それまでの研究を反省してのものだった。が、この研究潮流は、旧社会主義圏の現地研究を本質主義・原初主義的と貶める雰囲気も一部に生み出した。

この現地研究像は、部分的には、これまでの外部の関心のあり方が「結果的に」生み出したのではないかと、というのが、筆者の考えである。ポーランドの場合、確かに構築主義史学は体制転換を前後に漸く欧米から「輸入」された歴史理論であり、かつその後も、大きな影響力を発揮しなかった。だが、先述のようなトボルスキの存在は、影響力を発揮しなかった原因が、本質主義よりも独自の歴史「科学」像にあった可能性を教え

てくれるだろう。構築主義史学に対し、強い関心を払い、業績をあげてきたのは、他にもない晩年のトポルスキや彼の門下生である¹⁷⁾。第1節で触れたようにトポルスキは『歴史と理論』編集者だった。同じ1928年生まれのH・ホワイトが1960年代以降、同誌で度々発表している点を考えると、その理論の存在も早くから知っていたと推測される。しかし管見のかぎりでは、社会主義時代のトポルスキはホワイトに触れていない。トポルスキが触れはじめるのは、ホワイトによる構築主義史学が世界的に爆発的な影響力を発揮した1990年代以降のことであった。

トポルスキは、多くの方法論のひとつとして、また決定的弱点をもつ方法論としてのみ、ホワイトを論じた。彼は、ホワイトについて、客観的過去を知るという点では現実主義者（素朴な経験的単一の実在を信じる実証主義者）なのに、過去の「事実」の構築性を語る際には理念主義者（構築主義者）という一貫しない態度をとっていると指摘する（Topolski 1998: 357）。それと同時に、トポルスキはこの立場を「擬似現実主義的構築主義（konstruktywizm quasi-realistyczny）」とよび（Topolski 1998: 355）、自著『歴史学方法論』に触れつつ、このように主張した。

史料とは研究対象についてすべてを語るものではなく、「過去の像を構築し、その構築物について議論する際に助けとなるであろう『すべて』」である。さらに研究者の問題関心や論証上の癖等によっても、語る内容が変わってくる代物である。しかし、だからといって導かれた歴史像がすべて過去と一致しない構築された不毛なものというわけではない。問題関心等を支える研究者の経験等も史料外情報（源）として重要な判断基準だからである（Topolski 1998: 340-341）。それ故、

歴史の語りは真かもしれないし偽かもしれない。だが、それは過去実在との一致（korespondencja：言語学的意味での一致）という意味においてはではない。コミュニケーション共同体（wspólnota komunikatywna）、すなわちこの同じ言語を利用し、これら同じ諸規約（konwencja）と、もっとも一般的なスケッチにおいてであっても世界について類似の理解をもった人々の共同体、が語りに対し、真偽の一線上であれやこれやの地位を与えるという意味においてのみである（Topolski 1998: 387-388）。

ここには、第6節で登場した理念化・概念化関連の術語はほとんど登場しない。だが自著の参照を促しているという点でも、基本的に理念化・概念化作業を念頭においた主張と考えるのが妥当だろう。ここで語られているのは、明らかに第3者との共有による真偽の検証というポズナン学派の発想である。トポルスキからすれば、構築主義史学の方がむしろある種の素朴な実証主義や本質主義を採用している。そのために、ホワイトの主張、構築主義史学は、トポルスキの歴史学方法論に対して、何ら衝撃を与えようがなかった¹⁸⁾。先述のように、トポルスキの「概念化」史学は、そもそも経験的で具体的な世界をそのまま描写したものとは考えられていないからである。

さて、このようなトポルスキの反論をみたとき、構築主義史学を受容しないのは本質主義的な見方を頑なに引きずっているからだ、という解釈はどこまで妥当だろうか。トポルスキ（の研究計画）を高く評価してきたポーランド史学界に対して、この類推はどこまで適当だろうか。いわゆる「西」の人間もまた、社会主義国における経験研究の背景にある理論的遺産を踏まえない、ある種の政治的見方を導入している可能性があるとはいえないだろうか。ポーランド人の自己解釈と独立して外在的視点を導入すること自体には、積極的な意義がある。しかしその外部視点が一定の生産性に結びつく以上に、対象に内在的に迫らない蔑視をまかり通らせている場合、その視点の妥当性について、原点に立ち返った見直しが必要だとはいえないだろうか。

8 結びにかえて

研究者はその研究対象によって、居住地域（もしくは体制如何）に関係なく、ある程度、共通の理論的関心を抱きうる。他方で、学術共同体は、一般的に言語的・社会的共同体と最も密接に関係しながら営まれるため、その研究者が観察する対象社会の状況如何だけでなく、その研究者が活動する地域の学術共同体が蓄積してきた学術的遺産や学問的関心のあり方によって、彼／彼女の理論の精緻化の方向性が変わりうる¹⁹⁾。本稿は、このような位相に出現する学術理論の地域性に着目し、ポーランドの代表的マルクス主義史家トポルスキの業績について思想史的分析を加えた。そして、アナル学派との遠近によって理解が進められてきた従来の解釈方法は不十分で、彼のテキストは、科学哲学と弁証法の接合という文脈上で理解を深めていくことがより重要であることを指摘した。本稿ではこの作業を通じて、旧社会主義圏における研究に対しては、現地の学術遺産を内在的に理解しない、逆の意味で「政治的な」価値判断が紛れこんでいるのではないかと示唆した。

もちろんポズナン学派の理念化計画にも限界はあるだろう。ひとつ指摘するなら、理念化内容の有効性の拡張と制限を可能にする共有という考え方の問題である。人の認識が歴史的・社会的ないし宗教的に多様な中で、この担保がどこまで有効性を発揮するのか、多くの人が疑問を感じるに違いない。本稿は社会主義ポーランドの歴史学界の一断面への接近を目的としたので、この問題については追究しなかった。だが、歴史の記述方法に関する関心も高まる今日、トポルスキの方法論の可能性と限界の検討もまた、大いに意義のある課題だといえるだろう。

なお本稿は、いわゆる東西間の学術理論の性質の差をより端的に示すために、逆に詳細に踏みこまない、ごく荒削りな立論に留めた。本来的には、例えば1970年代ポーランドにおけるアルチュセールの読まれ方等を検討することを通じて、当時のポーランドの科学的知識のありよう、科学を支えていた背景的思想を特定していくのが、専門研究

としてより適切な問題設定の仕方だと考えられる。こうした個別論点については、今後の課題としていきたい。

謝 辞

本稿は、「ポーランド歴史学における『歴史学』概念——J. Topolskiを手がかりに」(2006年1月14日、本研究會、於国立民族学博物館)発表原稿を整理したものである。貴重な報告機会を与えてくださった本會の皆様に感謝いたします。

注

- 1) 例えば社会経済史家クーラ (W. Kula) による次の言及。

歴史は、今日では、別のところから知らされる、古くから既に明白な真実を証明する必要がある。この真実を証明し、誉め称えねばならない。実演的にそれを教えねばならない。

すでに誤謬と定められた真実の方は「破碎せねば」ならない (Grabski 2000: 206)。

これを引用したグラブスキによると、クーラは机の引出しの中にこう殴り書きしたという。ここでクーラがいったのは、人類の到達地点である社会主義・共産主義への移行の必然性が立証できるような歴史記述が必要になったということである。この鑄型を証明しやすいよう研究領域が選ばれ、学術区分が再確定され、時系列の整理方法が工夫された。その端的な例が労働運動史だった。活動家の理論的業績と実践とを結びつけ、それを主軸に歴史を記述すると、社会主義時代への到達はあたかも自明であるかのように描けたからである (Schaff 1955を参照)。

上述した学術区分の再確定という表現は、やや抽象的なので、一例を示してみよう。東欧史学に詳しいイッガースによると、マルクス主義史学は基本的に、唯物論的前提にも拘わらず、イデオロギーの積極的な役割を強調し、その担い手である個人の役割も強調する「政治史」を中心に展開される。この政治史は「下の連中の歴史」ではなく、「偉大な個人にリードされる」[「党の制度史」]である。次にそれを補佐するための「社会・経済史」が周縁に存在する。こちらは階級闘争が体制転覆の原動力となるという哲学体系を、歴史的事実として実証するための史料蒐集と吟味を行う学問である (イッガース 1986: 205)。対してポーランド史家グラブスキは、2000年、この「階級闘争と党に率いられる民衆の歴史」は、本来、社会史・経済史に属していたものが、スターリン時代に強固に神話化=政治化されることにより、政治史として再構成されてしまったものであると回顧している。結果、社会主義圏では本来の「政治史は存在しない」ままになってしまったと彼は指摘する (Grabski 2000: 203, 207-209)。

グラブスキがいう本来の「政治史」はアメリカ政治学を踏まえた政策決定過程史に近く、今日のポーランドでは基本的にこちらが「政治史」の意味として通用する。また石井規衛氏が指摘した、未刊文書を丁寧に探査し政策決定過程の分析を試みる「オーソドックスな政治史」という表現とも内容的に重なるだろう (石井 2003: 336)。以上のような形で、各ディシプリンの担当領域がマルクス主義哲学体系に沿うように設定し直されたのである。

- 2) 例えば第2次大戦後、1945~1948年の頃は、マルクス主義の解釈が多様だっただけでなく、マルクス主義以外の歴史理論とも競合があり、多く有用な問題提起があったといわれる。具体的には、第7回全ポーランド歴史学者大会 (1948年) 大会報告集 (Leśnodorski 1948; Lutman 1948; Śreniowski 1948) 等。ただしトボルスキは1956年まで歴史家と当局の間に大きな対立

はなかったと述べている (Topolski 1992: 174, 175)。またいわゆるスターリン期 (1949～1956年) 以降、ポーランド歴史学大会 (1956年) とポーランド歴史学者大会 (1958年, 於クラクフ) で、早々にスターリン史学批判がなされ、そのひとりポーランド科学アカデミー歴史学研究所 (IH-PAN) 所長マントウフェル (T. Manteuffel 1902-1970) が発表後に辞職を求められたものの、若手史家の抵抗で辞めずにすんだこと等が英雄史的に語られる (Drozdowski 1999: 52)。他、Z・パウマンは、体制追従的なソ連の学者と違って、ポーランドの社会学者は支配者を管理する機能を果たしていたとする (Bauman 1976: 105)。

ポーランドは学問の自由を尊重する伝統が強く、国家による学問世界への介入が直接的だった旧ソ連やドイツ民主共和国とは状況が大きく違ったと誇る声は、留学中の筆者も耳にすることが多かった。こうした事実が必要以上に誇られるために、社会主義期ポーランドにおけるマルクス主義関連議論の豊穡性が、外部から逆に正当に評価されにくくなっている側面があるように思われる。

- 3) 本稿での問題関心のあり方は、ソ連民俗学に関する坂内徳明氏の一連の業績 (坂内 1978: 1981; 1985; 1992; 1995) とやや共通する。すなわち、政治的事件を理由にソ連民俗学が停滞したと考える外国研究者の推論の是非 (坂内 1978: 577, 580)、1960年代の伝統的民衆文化への関心の高まりを、「伝統への回帰」と捉える欧米研究者の誤り (坂内 1985: 130)、表層的な社会変化の背後にある社会の基底部分を理解する手がかりとしてのロシア・アカデミズムという「文体」研究の有効性 (坂内 1995: 313) といった着眼点である。

なおポーランドの学問領域区分は、社会主義時代を待つまでもなく、そもそも19-20世紀転換期からすでにいわゆる西欧の主流と異なっていた。シャツキは、ポーランドでは世紀転換期から史的唯物論への関心が高く、社会科学が一般的に自然科学よりも人文学に近づく傾向があったと指摘している (Szacki 1995: 113)。外部の眼には社会科学が再生したかに理解される1960年代開放期でも、当事者が実際にとりこんでいたのは「文化科学」の擁立にむけた種々のジンテーゼ作業であった。この偏差を示す例としては、後段で紹介するトボルスキの『歴史学方法論』背表紙の端書きが、英語版とポーランド語版で異なることが指摘できる (両版は版も出版年も異なるので厳密な比較には不適當だが、内容的にきわめて示唆的である)。

1976年英語版は、「総合文庫 (Synthese Library)」シリーズの一冊として刊行された。同文庫は東欧圏の研究者の業績が英語で読めるようにと企画され、内容的には「認識論、論理学、方法論、科学哲学、科学・知識社会学ならびに社会・行動科学の数学的方法に関するモノグラフ」を集めていた。その目的は「方法論・科学哲学と認識論分野で今日最も優れた業績のための公開討論の場を提供すること」におかれていた。中核となったのは「経験的・哲学的視座の相互作用を説明しているような方法論的研究や、経験科学の形式上の (論理的、集合論的、数理的、情報論的、決定論的) 方法論」である。

対して1984年ポーランド語版は「人文科学方法論 (Metodologia Humanistyki)」と銘打たれ、「文化科学提唱者の方法論的自覚という観点から示唆的役割を果たしそうな立論」の提示を目的とした。そのため「人間社会や文化、特定領域の歴史を知るための方法を立ちあげ、洗練させるのに重要な意味をもつなら、他の人文科学諸分野とも結びつけた理論的探求をなし、その結果を示す」とした。文化科学とは社会科学と哲学上の科学方法論を横断する、ズナニェツキ (F. Znaniecki 1882-1958) の語法に基づく新ディシプリンだった。このようにほぼ同一内容の業績を、一方は社会科学、他方は人文科学の一冊として計上しているのである。

ここで注意したいのは、坂内氏の指摘とも共通するが、こうした構造的異同について慎重に吟味せずに、文化や民族を研究しているというだけで原初主義や本質主義と結びつけた現地研

究(者)像を導きがちな外部研究者の存在であろう。

- 4) 類似の研究手法としてルニアンスキやオクラサの研究 (Runiański 1976: 167-187; Okrasa 1987)。組織の構造や相互作用, リーダーシップや予算, 組織間・組織内部の不平等, 当該社会における社会的効用の有無等が研究業績に与える影響や, 個人の研究嗜好が集団研究ではどう変容するか等を検討している。
- 5) 同時代のトボルスキ以外の研究者の著作には, 資料収集等の歴史調査方法論に関する記述がめだつ。例としてモシチェンスカやセルチックによる入門書 (Moszczeńska 1960; Serczyk 1967)。
- 6) グラプスキは「当時の理論が専門化しすぎて, すでにイデオログや政治家が理解できないものになり, スターリン時代以降は, どの業績がマルクス主義的でどれがそうでないかの区別は, 実際的な意味をもたなくなった」と指摘している (Grabski 2000: 215)。
- 7) イッガースの理解の背景にある戦後欧米史学の潮流について簡単に触れておく。まず個人を中心に描いてきた戦前史学に対して批判が出た。経済史や人口統計学, 人類学等に着目したアナール学派に対して世界的関心が高まったのは, その結果だった。同時期, 社会主義圏では物質文化史研究が盛んだった。1960年代, 東西の学術交流が国際会議等を通じて大いに進む。またアフリカ諸国の独立を受け, 無史料地域の研究手法に需要が生まれ, 記憶や口承が新たな史料として注目されるようになった。アメリカを中心に新経済史が流行し, 新フロイト学派の影響を受けた心理史研究が始まったのもこの頃である。1970年代には人類学が圧倒的影響力をもち, 人々の生活により密着する歴史記述としてミクロ・ヒストリーへの関心が高まった。ポーランド史家ノーマン・デイヴィス (N. Davies) はこの系譜に属する。これと前後して, ポストモダン系史学が生まれ, 例えば H・ホワイトらが歴史学の物語性を暴露し, フーコーが言説分析を提唱した。
- 8) なおイッガースは, 近年になって, ポーランドの社会経済史家がアナール学派に共鳴したのは, 文化的アプローチへの関心があったからだと総括している (Iggers 2005: 473)。1970年代イッガースの理解の底流には, ソ連独裁体制下に歴史人類学者グレーヴィチを発見した外国人研究者が表した嬉しい驚きと同じ感情が流れていたようにも思われる (グレーヴィチ 1990)。
- 9) トボルスキが引用しているのは以下の文章である。「人は自ら歴史を創りだす。だが, それを自由に創りだすのではない。自ら選んだ環境下ではなく, 彼らが直接居あわせた, 彼らに与えられ, 委ねられた環境下で創りだすのである」(Ludzie sami tworzą historię, lecz nie tworzą jej dowolnie, nie w wybranych przez siebie okolicznościach, lecz w takich, w jakich się bezpośrednio znaleźli, jakie zostały im dane i przekazane. 下線は筆者による)。出典は, 1929年に出版されたポーランド語版とされている。この訳文で興味深いのは, 下線を引いたように, 不定動詞ではなく, 定動詞が用いられている点であろう。定動詞の適用が伝えるのは, ここでいう環境が, 時間的・空間的な意味で一回性の強いものとして理解されているということである。

またトボルスキはこれに続く引用から明らかなように, マルクスのこの文章から一種の実存的主体論を読みとっている。すなわちたまたま与えられた条件の制約下で, いかなる行動をとるか, (どんなに小さいものであっても自分の責任で) 最後の決断を下すという意味で主体的な人間像を表した文章として理解しているのである。

この点, 近年, 日本で出された横張誠氏の翻訳, 「人間は自分自身の歴史をつくるが, 自分が選んだ状況下で思うように歴史をつくるのではなく, 手近にある, 与えられ, 過去から伝えられた状況下でそうするのである」は, ややニュアンスの異なる訳出になっているように思わ

れる（マルクス 2005: 4）。こちらは環境的制約性の方により力点をおいた解釈となっているのではないだろうか。横張氏たちの理解とトボルスキの理解はやや異なっている。註16とあわせて、この点に注意されたい。

- 10) 人文主義派は、論理実証主義を「狭量」で「ドグマ的」なものと捉え、「そこから解放されたい」というメンタリティを共有していた。

「唯一の正しい方法」、「唯一の科学的答え」にはもううんざりしていた。正しいか間違っているかという観点から理念を研究したがる人々、とくに「真に学術的な方法」について独占をもちこもうと唱えたり、自分こそ無条件的真実を知っていると申し立てたりする人々に対して懐疑的だった（Walicki 2000: 232-233）。

- 11) ルヴフ＝ワルシャワ学派の日本語の概説はさしあたって加地（2007）等を参照されたい。
- 12) クミタは、ポズナン大学で哲学を学んだ後、1957年、ポズナン大学哲学・歴史学部論理学科ヴィエグネル教授の下で助手に採用。その後、同専任講師（1962）、助教授（1968）、准教授（1974）、教授（1979）。この間、1969～1976年に哲学研究所所長。
- 13) 同学派は『ポズナン科学哲学・人文科学研究（*Poznan Studium in the Philosophy of the Sciences and the Humanities*）』を通じて、国際社会に成果を公開していた。同誌は1975年、ラドピ（Radopi）社（オランダ）より創刊された。翌年、ポーランド語版の刊行も決定したが、英語国際版の創刊の方が早かったのである。ポーランド語版は、国立学術出版局（PWN）ポズナン支部より『ポズナン科学哲学研究（*Poznańskie Studia z Filozofii Nauki*）』として刊行されたが、体制転換を通じて運命が大きく変わり、1992年、『ポズナン人文科学哲学研究（*Poznańskie Studia z Filozofii Humanistyki*）』に改題、出版局もポズナン大学に移管、1997年、外国語社会科学文献の翻訳出版を専門的に手がける出版社（Zysk i S-ka）に再移管された。ただし英語版・ポーランド語版ともにノヴァクが編集長を務め続けている。

なおここで注意したいのは、註3との関係である。この雑誌は国内版では単純に科学哲学雑誌と銘打っていたのに対して、国外に対しては、自誌が科学哲学と人文科学を接合した雑誌であることを、わざわざ断っていた。このことは翻って、科学哲学の人文科学への適用が、当時のポーランド国内では自明のものとして通用したことを推測させる。すなわち註3のシャツキの言質の「正しさ」を裏づけるのである。

- 14) ノヴァクはポズナン大学教授。1967年にワルシャワ大学で法学博士号を取得した後、1974年、ポズナン大学哲学研究所認知弁証法学科（Zakład Dialektyki Poznania）部長に着任。同学部は後に認識論学科（Zakład Epistemologii）と改称した。なお1962～1980年間は統一労働者党党员、1980～1994年間は「連帯」運動に参加、地下出版に関与したかどで1985～1989年間には同大学を追放されていた。
- 15) 彼らの発想は、いわゆる西欧科学においては漸くデイヴィドソンあたりで体系化されるものに近い。実際、デイヴィドソンはルヴフ＝ワルシャワ学派のひとりタルスキ（A. Tarski 1901-1983）に多くを負っていた（デイヴィドソン 2007b: 278-299）。デイヴィドソンは、タルスキが論理学から哲学の世界に踏みこまなかったと述べている（デイヴィドソン 2007a: 411）。この発言からすると、彼は、その後のポーランドで、論理学や認識論をその世界に閉じこめたままにせず、人文科学全般、歴史学へ生かしていこうとする努力があったことを知らなかったように思われる。
- 16) 今日、いわゆる「西側」における一般的な解釈では、マルクスの方法論は構造論的の把握と理解されているだろう（今村 2005: 362）。個々人の行動を構造連関の中で捉える手法である。トボルスキが構造論的の把握法論者としているのは、指導教授ルトコフスキや戦前の偉大なポーラ

ンド史家ハンデルスマン (M. Handelsman 1882-1945), アナール学派等である (Topolski 1984: 107-142)。

- 17) ポモルスキ (J. Pomorski 1954-), ヴジヨセク (W. Wrzosek 1952-), ドマンスカ (E. Domańska)。とりわけドマンスカは、大学院生時代、H・ホワイトに直接、師事もしている。1998年にはホワイトを招聘して学際セミナーを開講し、奉職したポズナン大学でもホワイトやF・アンカーシュミットらの構築主義的史学について授業を多く展開した。H・ホワイトの業績に関するポーランド語論文も多く、今日、ポーランドにおける構築主義史学の第1人者と認められている (Pomorski 1986; Walas 1992; Domańska 1992; 1993)。

なお構築主義史学が立脚点のひとつとする「言語論的転回」(トポルスキは英語イタリックの *linguistic turn*, ポーランド語の “lingwistyczny zwrot” を併用している) 自体は、1960年代以降、ポーランドでも文学領域でとりあげられ、文学理論や意味論、修辞学におけるメタファーの問題が議論され、言語分析の問題も認識されていた。だが、文学から歴史学への挑戦が結局、起こらなかった (Topolski 1998: 185)。ポズナン学派の科学方法論は人文科学全般を対象としていたはずだが、学術領域によってその受容の度合いに差があったのかもしれない。

また構築主義史学を支えるポストモダン系哲学に関して、ポーランドでは本来の用法と異なる概念使用がよくみられるとの指摘がある。体制転換後、研究手法の「ポストモダン」化を叫ぶ声があるが「ポストモダンの概念の眼鏡でみると、現代ポーランドは漸く自分の近代を歩み始めた」段階なので実態感覚が異なり、結果として不適切な概念使用に陥るのだらうと指摘されている (Bolecki 1999: 39-40, 13)。こうした本稿が扱えなかった問題の次元が、本稿の立論にどのような影響を及ぼすか。今後の検討課題としたい。

- 18) ポーランド語の場合、そもそも「歴史」には出来事史 (dzieje) と物語史 (historia) というふたつの単語が存在する。百科事典で調べると、素朴な実証主義に根ざす出来事史をゆびさしするのが前者、それを省察して再構成し、ひとつの物語として人に提示するという意味を内包するのが後者である。それ故、「歴史学方法論 (metodologia historii)」は必然的に語り方の方法論というニュアンスをもつ。物語をより適切な形に整えあげ、批判的吟味により耐える内容に高めていくための方法論であることが含意されている。この点でも、すべては構築された偽りだとする主張はさして意味をもちえなかったと考えられる。なお本稿では、両語について特に区別せず、ともに「歴史」をあてた。

以下、百科事典より該当箇所全文を訳出しておく (Topolski 2004: 590)。執筆者はトポルスキである。

【歴史 (historia)】(ラテン語<ギリシャ語)

ギリシャ語文献では、歴史は、調査や調査に関する語りの報告、物事の正確な記述を意味していた。この概念には徐々に出来事史 (dzieje, すなわち過去に何が起きたか) が結びつくようになった。中世では、このように理解された出来事史とは年表や年代記のような概念の方が同一視されていた。というのも、物語史 (historia) という用語は、同時代的なもの・観察されるもの・アクチュアルなものを意味していたからである。出来事史と同時に、それについての語りの報告も意味するような今日の歴史概念は、近代に入ってから発展しており、(発展の仕方も：筆者註) 諸言語によって様々であった。英語では歴史 (history) という1単語のみが、ドイツ語では基本的な意味として「生じる」(geschehen) に由来する出来事史 (Geschichte) という単語が、そしてポーランド語では出来事史 (dzieje) と物語史 (historia) という2語 (か採用された：筆者註)。物語史 (history) の方がより広義で、出来事史の範疇も含む。18世紀の歴史理論家 (とりわけヘーゲル) は、

出来事史 (res gestae) としての歴史と、出来事についての物語史 (rerum gestarum, historia dziejów) としての歴史を明瞭に区別していた。出来事史としての歴史は、様々な全般レベルで登場する。世界史、大陸史、国史、民族史、地域史として、また過去の現実についての特定領域史 (従って経済史、政治史、戦争史、文化史、科学史、芸術史等) としても、特殊な事件や過程 (例えば革命) や昔の人々の生活の特定の様相 (例えば恐怖)、さらには過去に関する全般省察 (すなわち歴史哲学や歴史過程論等) としても (登場するのである: 筆者註)。出来事史は、出来事史についての思考と理解される物語史を媒介にしてのみ存在する。つまり「人びとにとっての」過去は、出来事史をめぐる思考の主題となったときだけ存在し、過去を考える人によって存在させられる (出来事的) 過去は、次のような形態をもつことになる。

- (1) 何があったかについての (個人的・集団的) 記憶
- (2) 歴史意識: 歴史を意識したり、体験したりすること (伝統、すなわち過去が人々に「もたらす」ものとか、自分の歴史意識を記憶に留め、また問題化する人々がその形態である)。これが民族意識の基本的な構成要素のひとつとなっている。
- (3) 歴史学: 過去に何が起きたかについての、意識的な、より一層専門化された記述・説明・評価。時代によって様々な目的が、この努力を輝かせてきた。過去から先例を引きだす (historia magistra vitae, 生きた師としての歴史)、個人や国家、民族、宗教組織等の利益や欲求を根拠づける、究極的には過去に関する学問的知識を生みだす (といった具合に: 筆者註)。学術目的を満たすには様々な調査方法、とりわけ史料批判能力や、歴史過程のおおまかな全般的外観を理解する力、いいかえると個々の事実をより大きな構造や過程に結びつける力が不可欠である。

歴史過程のメカニズム (原因となる動力) に関する問いの答えが、様々な歴史哲学の骨子をなしている。歴史過程 (dzieje historii, 歴史的な出来事) は、人々が影響を及ぼせない何らかの力 (摂理、自動実現する進歩、経済的要因等) が働いているのだから、人々の決断や活動とは無関係だとする確信と、歴史の流れは (カーライル卿の構想にあるように) 卓越した個人の意志が決定しているとする確信の間で、歴史哲学はゆれ動いてきた。従って様々な観念が、人びとの意識的かつ目的をもった活動に対して、様々な役割を帰しているのである。

- 19) なお例えば市井三郎は科学哲学に関心の高い歴史学者というトボルスキと近い性格をもつ。だが同時期の彼が生み出したのは「キーパーソン論」(市井 1978: 68-69) だった。これは大多数の人間が支配される法則性にあてはまらない少数者の役割を因数としてかけあわせることにより、歴史上の社会変動を説明しようとする理論だった。つまり市井の歴史観は、少数の卓越者が最終的決定打を与えることで歴史は初めて動くというものだった。この場合の卓越者には革新的発明をなした人物等も含めて問題ないだろう。が、基本的にナポレオン等の革命家が決定的インパクトを与える政治史が、やはり市井の理論化をめざしていた歴史変動像に近いと推測される。対してトボルスキの歴史変動論は基本的に社会経済史だった。卓越した個人の役割も無視しないが、歴史変動を引き起こすのは、基本的に無数の無名の一般人による活動の蓄積とされている。

この両者の歴史変動観の差は、今度は、市井周辺 (1970年代日本) にアナル学派や社会経済史に強い関心を抱く者がいなかったから、と説明できる可能性があるだろう。この点は理論上の流行が必ずしも西欧と同じでない日本に住む研究者が、同じくずれをもつポーランドを客体として議論するという事態に対し慎重であることを求めているといえるのではないだろうか。

文 献

Althusser, L.

1975 *Czytanie „Kapitału,”* translated by W. Dłuski. Warszawa: PWN.

坂内徳明

1978 「ソ連民俗学の現在」『民族学研究』42(4): 356-368。

1981 「ソ連民俗学の形成——一九二〇年代前半のユーレイ・ソコロフを中心として（学問の現状と動向）」『一橋論叢』85(4): 577-599。

1985 「現代ソ連におけるロシア・フォークロア学の動向とその動向とその問題点」『社会学研究』23: 129-252。

1992 「ロシアにおける民俗学の誕生」『一橋論叢』108(3): 425-444。

1995 「ロシア文化という方法」『一橋論叢』113(3): 305-321。

Bauman, Z.

1976 East European and Soviet Social Science: A Case Study in Stimulus Diffusion. In R. Szporluk (ed.) *The Influence of East Europe and the Soviet West on the USSR*, pp. 91-116. New York: Praeger.

Bolecki, W.

1999 *Polowanie na postmodernistów (w Polsce) i inne szkice*. Kraków: Wyd. Literackie.

Connelly, J.

2000 *Captive University: The Sovietization of East German, Czech, and Polish Higher Education, 1945-1956*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.

デイヴィドソン, D.

2007a 『合理性の諸問題』金杉武司他訳, 東京: 春秋社。

2007b 『主観的, 間主観的, 客観的』清塚邦彦他訳, 東京: 春秋社。

Domańska, E.

1992 Metafora-Mit-Mimesis: Refleksje wokół koncepcji narracji historycznej Hayden White'a. *Historyka* 22: 29-44.

1993 Maska przeszłości: O postmodernistycznej filozofii historii. *Teksty drugie* 1: 107-113.

Drozdowski, M. M.

1999 *Moja droga do III Rzeczypospolitej*. Warszawa: Typografia.

フエツチャー, イリン

1968 「東欧修正主義哲学の動向」中田美喜訳, 『自由』10(6): 172-183。

グレーヴィチ, A.

1990 『歴史学の革新——「アナール」学派との対話』栗生沢猛夫他訳, 東京: 平凡社。

Grabski, A.

2000 *Zarys historii historiografii polskiej*. Poznań: Wyd. Poznańskie.

市井三郎

1978 『歴史を創るもの』東京: 第三文明社。

イッガース, G. (Iggers, G.)

1986 『ヨーロッパ歴史学の新潮流』中村幹雄他訳, 京都: 晃洋書房 (1975 *New Directions in European Historiography*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press)。

- 2005 *Historiography in the Twentieth Century*, Book Review of Lutz Raphael 2003. *Geschichtswissenschaft im Zeitalter der Extreme: Theorien; Methoden; Tendenzen von 1900 bis zur Gegenwart*. Munich: C. H. Beck. *History and Theory* 44: 469-476.
- 石井規衛
2003 「ソ連文明と二〇世紀」歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題1980～2000年 II 国家像・社会像の変貌』 pp. 327-344, 東京：青木書店。
- 今村仁司
2005 「解説」K. マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日／経済学批判要綱「序説」「資本制生産に先行する諸形態」／経済学批判「序言」／資本論第一巻初版第一章』（マルクス・コレクション 3） pp. 361-366, 東京：筑摩書房。
- 加地大介
2007 「兩大戦間のポーランドにおける論理学と哲学」飯田隆編『論理・数学・言語——科学の世紀と哲学』（哲学の歴史11） p. 427, 東京：中央公論新社。
- Kmita, J.
1971 *Z metodologicznych problemów interpretacji humanistycznej*. Warszawa: PWN.
- Kmita, J. and L. Nowak
1968 *Studia nad teoretycznymi podstawami humanistyki*. Poznań: Wyd. Uniw. Poznańskiego.
- Kuczyński, J.
1972 Zadania studiów filozoficznych w rozwoju nauki i kultury filozoficznej w Polsce. *Studia Filozoficzne* 11/12(84/85): 17-27.
- Leśnodorski, B.
1948 Uwarunkowanie społeczne faktów historycznych. In *Pamiętnik VII powszechnego zjazdu historyków polskich we Wrocławiu 19-22 września 1948* II (1), pp. 11-18. Warszawa: Automa, Polskie Towarzystwo Historyczne.
- Lutman, R.
1948 Podstawy metodologiczne historiografii. In *Pamiętnik VII powszechnego zjazdu historyków polskich we Wrocławiu 19-22 września 1948* II (1), pp. 19-28. Warszawa: Automa, Polskie Towarzystwo Historyczne.
- Mackiewicz, W. (ed.)
2001 *Polska filozofia Powojenna, I*. Warszawa: Agencja Wydawnicza Witmark.
- マルクス, K.
2005 「ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日」横張誠訳, K. マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日／経済学批判要綱「序説」「資本制生産に先行する諸形態」／経済学批判「序言」／資本論第一巻初版第一章』（マルクス・コレクション 3） pp. 3-138, 東京：筑摩書房。
- Maternicki, J.
1990 Geografia historyograficzna II Rzeczypospolitej. In J. Maternicki (ed.) *Środowiska historyczne II Rzeczypospolitej, IV: Materiały konferencji naukowej w Krynicy w 1989*, pp. 9-52. Warszawa: Zakład Historii Historiografii i Dydaktyki Historii UW.
1999 *Warszawskie środowisko historyczne w okresie II Rzeczypospolitej*. Rzeszów: Wyd. Wyższej Szkoły Pedagogicznej.

- Moszczeńska, W.
1960 *Wstęp do badań historycznych*. Warszawa: Wydaw. UW.
- 奈良和重
1971 書評「リチャード・T. ド・ジョージ著『新しいマルクス主義——1956年以降のソヴェトおよび東欧のマルクス主義』(R. T. De George, *The New Marxism: Soviet and East European Marxism since 1956*, 1968)」『法学研究』44(12): 101-106。
- Nemeth, Th.
1980 Althusser's Anti-Humanism and Soviet Philosophy. *Studies in Soviet Thought* 21: 363-385.
- Nowak, L.
1970 O zasadzie abstrakcji i stopniowej konkretyzacji. In B. Janiec (ed.) *Metodologiczne założenia „Kapitału” Karola Marksa*, pp. 117-213. Warszawa: KiW.
1971 *U podstaw Marksowskiej metodologii nauk*. Warszawa: PWN.
1974 *Zasady Marksistowskiej filozofii nauki: Próba systematycznej rekonstrukcji*. Warszawa: PWN.
1977 *Wstęp do idealizacyjnej teorii nauki*. Warszawa: PWN.
- Okrasa, W.
1987 *Funkcjonowanie i efektywność zespołów badawczych*. Wrocław: Ossolineum.
- Pajestka, J.
1989 Prolegomena globalnej racjonalności człowieka. *Studia i materiały* (Polska Akademia Nauk. Instytut Nauk Ekonomicznych 20). Warszawa: PAN-INE.
- Pomorski, J.
1986 Paradygmaticzna struktura historiografii współczesnej. *Przegląd Humanistyczny* 10: 77-102.
- Rudniański, J.
1976 *Nauka: twórczość i organizacja*. Warszawa: PWN.
- Sarlemijn, A.
1985 Convergence in the Philosophy of Science? A Contribution on the Possibility of East-West Discussions in the Field of the Philosophy of Science. *Studies in Soviet Thought* 30: 305-336.
- Serczyk, J.
1967 *Podstawy badań historycznych: Skrypt dla studentów I roku historii*. 2 ed. Toruń: Wyd. UMK.
- Schaff, A.
1955 *Obiektywny charakter praw historii: Z zagadnień marksistowskiej metodologii historiografii*. Warszawa: PWN.
- 嶋崎 隆
1989 「分析哲学と弁証法との狭間にある社会主義論理学——H・ヴェッセル『論理学と哲学』を中心に」『一橋大学研究年報 社会学研究』27: 143-172。
- Swiderski, E.
1980 Practice and the Social Factor in Cognition: Polish Marxist Epistemology since Kołakowski. *Studies in Soviet Thought* 21: 341-362.

Śreniowski, S.

- 1948 Zagadnienie metody badań historii ustroju Polski. In *Pamiętnik VII powszechnego zjazdu historyków polskich we Wrocławiu 19-22 września 1948* II (1), pp. 1-10. Warszawa: Automa, Polskie Towarzystwo Historyczne.

Szacki, J.

- 1995 *Sto lat socjologii polskiej*. Warszawa: PWN

田村康三

- 1969 「東欧の新マルクス主義哲学」『外務省調査月報』10(1): 49-57.

Topolski, J.

- 1976 *Methodology of History*, translated by O. Wojtasiewicz. Pordrecht, Holland: D. Reidel.
- 1978 Problemy modelowego ujęcia dziejów gospodarczych polski. In J. Wiśłocki et al. (eds) *Badania nad historią gospodarczo-społeczną w Polsce (Problemy i metody)* (F. Bujak and J. Rutkowski (eds) *Badania z dziejów społecznych i gospodarczych* 56), pp. 25-39. Warszawa: PWN.
- 1984 *Metodologia historii*. 3 ed. Warszawa: PWN.
- 1987 *Narodziny kapitalizmu w Europie XIV-XVII wieku*. Warszawa: PWN.
- 1992 Polish Historians and Marxism after World War II. *Studies in Soviet Thought* 43: 169-183.
- 1998 *Jak się pisze i rozumie historię: Tajemnice narracji historycznej*. 2 ed. Warszawa: Wyd. Rytm.
- 2004 *Historia. Nowa Encyklopedia Powszechna PWN*. v. 3, p. 590. Warszawa: PWN.

Topolski, J. and A. Malewski

- 1960 *Studia z metodologii historii*. Warszawa: PWN.

Walas, T.

- 1992 Przeciw historii. Poststrukturalistyczna krytyka historii—wybrane problemy. In R. Nycz (ed.) *Po strukturalizmie: Współczesne badania teoretycznoliterackie*, pp. 95-117. Wrocław: Wiedza o Kulturze.

Walicki, A.

- 2000 Leszek Kołakowski i warszawska szkoła historii idei. In R. Sitek, *Warszawska Szkoła Historii Idei: między historią a teraźniejszością*, pp. 229-249. Warszawa: Scholar (初出は1984 On Writing Intellectual History: Leszek Kolakowski and the Warsaw School of the History of Ideas. *Critical Philosophy* 1(2): 5-23.).